

# 草創期ヴァルドルフ幼稚園における エリザベス・グルネリウスの保育実践に関する考察

近藤千草\*

## A Study on the Childcare Practice of Elisabeth Grunelius in the Waldorf Kindergarten

Chigusa KONDO

### 要 旨

本稿は、ヴァルドルフ幼稚園の設立者であるエリザベス・グルネリウスの教育実践に着目し、草創期における幼児教育の実践を探ることを目的とした。グルネリウスは、シュタイナーが幼児教育で重視する「模倣」の重要性を自らの実践を通して価値づけた。子どもの模倣は、全身をもって「没頭する」、「没入する」行為であるため、心身の健康を促進させると共に、「魂」（思考、感情、意志、意欲、欲求、関心、記憶力、意識などの言葉で表現される力や活動）を育む行為でもある。グルネリウスは、子どもに干渉するのを控え、子どもが落ち着いて模倣の世界の中に生き続ける態度を取り続けるための「保育内容」、「保育方法」、「環境」を構成し、30年に渡る実践を通して実証したことが明らかになった。

キーワード：ヴァルドルフ幼稚園、エリザベス・グルネリウス、保育実践、幼児教育

### 1 はじめに

エリザベス・グルネリウス（Elisabeth Marie Adelheid von Grunelius 1895-1989、以下、グルネリウスと表記する）<sup>1)</sup>は、自由ヴァルドルフ学校附属幼稚園の設立者である。1926年設立の幼稚園に先立ち1919年には、ルドルフ・シュタイナー（Rudolf Steiner 1861-1925 以下、シュタイナーと表記する）により「自由ヴァルドルフ学校（Freie Wardolf Schule）」<sup>2)</sup>がヴァルドリア・アストリア工場主であるエミール・モルト（Emil Molt 1876-1936）<sup>3)</sup>の依頼により、

---

\*教授 教育学

雇用人の子弟を中心とした学校として設立された。シュタイナーは、自由ヴァルドルフ学校の設立と共に幼稚園の設立も望んでいたが、当時の財政的な困難や幼児教育に対する認識の低さから、シュタイナーの生前中にその夢は叶わなかった<sup>4)</sup>。しかし、シュタイナーは、幼稚園の設立に向けて小学校教師に幼稚園の必要性を訴えると共に、幼稚園教員としてふさわしい人材の探究に尽力していた<sup>5)</sup>。シュタイナーは、1914年に幼稚園教育養成課程を修了していたグルネリウスに出会っており、1920年にはグルネリウスが幼稚園教員として働いてもらえるよう説得を試みている<sup>6)</sup>。グルネリウスは、1914年に「コメニウス・ゼミナール」<sup>7)</sup>を、1918年には「ペスタロッチ・フレーベル・ハウス」(Pestalozzi-Fröbel-Haus)<sup>8)</sup>を修了している。しかし、シュタイナーの要請に対してグルネリウスは困惑していた。それは、シュタイナーが幼児教育の基本とする「模倣」に対する理解とその実践及び教師としての「模範的な態度」の形成に対する不安によるものであった<sup>9)</sup>。しかし、シュタイナーの粘り強い申し出に、グルネリウスはシュタイナーの支援を条件に承諾したのだ。そして、1920年にドイツ新政府が学校規則の変更を行い、新学年が4月から9月へと変更され、半年間の空白期間が生じたことを活かし、自由ヴァルドルフ学校の教室を利用して保育を試み<sup>10)</sup>、これが1926年の最初の公的なヴァルドルフ幼稚園へとつながっていく。

グルネリウスが、ヴァルドルフ幼稚園の設立を難儀と考えたことの一つに、シュタイナーの幼児教育における基本的態度の一つである「模範」と「模倣」との関係性とその実践化にあった。「模範」とは模範される教師であり、「模倣」とは教師を真似る子どもを指す。グルネリウスは1914年にシュタイナーと出会い、ドルナッハの「ゲーテアナム (Goetheanum)」<sup>11)</sup>建設に芸術家チームとして関わりながら、シュタイナーの講義にも参加し、人智学に基づく教育について学びを進めていた<sup>12)</sup>。これまでの学修課程において模範と模倣を幼児教育実践の根底に据えた方法について学んでいなかったが<sup>13)</sup>、ヴァルドルフ幼児教育を実践しようと決意させた背後には、その教育効果に対する信頼と確信があったからに違いない。

グルネリウスは、1920年のドイツの学校制度における新学年開始時期の変更に伴って生じた空白の半年間を利用し幼児教育を試みた。この時からシュタイナーの教育思想に基づく幼児教育実践を30年に渡り行い、1950年にはヴァルドルフ幼稚園での実践を体系的にまとめた『幼児教育とヴァルドルフ学校計画』を英語で出版した。本書は我が国において1981年に『七歳までの人間教育 シュタイナー幼稚園と幼児教育』<sup>14)</sup>として翻訳されている。本書においてグルネリウスは、幼児教育に対する考え方や幼稚園における保育の基本、幼稚園の設計と設備、家庭での育児について明らかにしている。当時の保育実践を記した本書に依拠してヴァルドルフ幼児教育の草創期における幼児教育の実態を整理することにより、今日まで脈々と続くヴァ

ルドルフ幼児教育の特性と今日的な意義を見出すことにつながる可能性が推察される。そこで本稿では、グルネリウスの草創期ヴァルドルフ幼児教育実践の整理を試みたい。

## 2 エリザベス・グルネリウスの幼児教育実践

グルネリウスは、シュタイナーの2つの言葉に興味を引いたと言う。一つは、「ジャン・パウロはすぐれた教育学的著述『レヴァーナ』のなかで、世界旅行家にとって、これまでやってきたあらゆる旅行よりも、彼が生まれてから数年の内に乳母から学んだことのほうがはるかに多くの意味を持っていると述べていますが、このことは疑いもなく正しいことです」、「幼児は教えられることによってではなく、模倣することによって学ぶのです」という言葉である<sup>15)</sup>。この二つの言葉に対してグルネリウスは、「従来の教育の観点から見てまったくあたらしい立場」<sup>16)</sup>と認識している。この言葉から、グルネリウスがこれまで学んだコメニウス・ゼミナールやペスタロッチ・フレーベル・ハウスでは学ばなかった視点であることが推察されるのである。

そこでグルネリウスは、乳児期における学びの大切さと子どもの模倣を通して学ぶという観点は本当に正しいことなのか、自身の生活を通して実践的に吟味付けることを決意している。グルネリウスは、「もし幼児が本当に模倣を通して学ぶのであれば、特定の既成の方法や規則を設けることから始めることはできない」と仮説を立て、まずは子どもの中に入り、「子どもと共に過ごす」中で子どもの「反応を見る」ことから始めた。そして、子どもの態度や行動を「理解する」ように努め、子どもの「本性に感情移入する」ことを心掛けるようにし、子どもたちを「自由に行動させる」ことを習慣にした。さらに、教師は「学ぶ立場」に身を置き、子どもに対する「畏敬の念」が感じられるように心掛けて、30年以上の実践を積み重ねている<sup>17)</sup>。この実践の態度の背景には、シュタイナーの「成長する人間の本質を認識しようとするならば、私たちは、人間の隠された本質を観察することから始めなくてはなりません」、「人間の本質のなかには、まず、感覚（視覚などの肉体的感覚）をもちいて人間を観察することによってとらえられる部分があります」<sup>18)</sup>という人間認識が存在する。そして、30年の実践を経てグルネリウスが明らかにしたことは、シュタイナーが述べた2つの言葉の正しさであり、その正しさを確認することができたということであった。グルネリウスはこの確かさについて、「子供は、このような教育環境のなかで生活を自由に模倣する。ふさわしい手本がそこにあるならば、0歳から七歳までの幼児は、必要な態度をすべて自分自身で身につけることができる。しかもそれによって子供の本性は、自然な仕方ですばい、栄える」<sup>19)</sup>と述べている。乳幼児期の保

育・教育において重要なことは、模範と模倣に基づく保育を基本に据え、教師の自由な創意と人格の直接的な働きかけであることを断言しているのである<sup>20)</sup>。

## 2-1. グルネリウスによる幼児教育の基本

グルネリウスは、子どもの発達を「人智学的人間学 (anthroposophische Anthropologie)」の観点から捉え、子どもの模倣力を重視した発達理解を基礎に据えた。

### (1) グルネリウスの発達理解

グルネリウスは、「魂の発達は肉体の発達に依存しているものなので、まず肉体の発達が顧慮されなくてはならないのです。しかもその発達は正しい段階を通して遂げられなければなりません<sup>21)</sup>」と、子どもの体の発達を正しく知ることについて指摘する。一般的に、人間理解を図る言葉の中に「魂」という言葉には違和感を感じるだろう。シュタイナーは人間を「身体 (Leib)」、「魂 (Seele)」、「霊 (Geist)」から成ると捉えている。「身体」は、物質で構成され目で見ることのできる肉体である。「魂」は、思考、感情、意志、意欲、欲求、関心、記憶力、意識などの言葉で表現される力や活動を指す。「霊」は、魂に対して方向や意図を示し、真理や善に生きる力を与える作用と広瀬 (2009) は解説する<sup>22)</sup>。シュタイナーはさらに、人間の体は4つの要素、すなわち、「物質体 (physischer Leib)」、「エーテル体 (Aetherleib)」、「アストラル体 (Astralleib)」、「自我 (Ich)」から成り立つと考えた<sup>23)</sup>。物質体とは、鉱物と同じ状態を指し、人間は死と共に物質体が崩壊し、鉱物と同様となる。生きている時には鉱物とはならず、臓器が働き、血が通い、肉体に柔軟性があり生命活動が営まれる。このような生命活動を司る働きがエーテル体である。人間はエーテル体により生命活動を行っているが、それに伴い様々な感覚的知覚を受け、物事を意識し、衝動を動かされる。このように様々な知覚を感じ取る感情の力がアストラル体である。人間の最大の特徴は、自分自身を「私」と感じ取る力を持つことであり、これが自我である。このような人間の構成要素は加齢とともに発達していく。したがって、その発達段階に最も育ちゆく要素に対して教育的な働きかけをしていくことが有効と考える。

グルネリウスは、幼児期の段階において、まず「肉体の発達が考慮されなければならない」と述べていた。それは、幼児の発達の特徴と関連している。子どもがこの世に誕生してから最も著しい発達を遂げるのは身体である。身長や体重の増大は著しく、ハイハイからつかまり立ち、歩行へと数カ月で成し遂げてしまう。つまり、乳幼児期に最も大切なことは、教師が身体の発達を阻害することのないような環境を作り上げることである。シュタイナーは、「子ども

が生まれたあとは、教育者が子どものまわりに正しい物質的な環境を整えてあげなくてはなりません」、「このような正しい物質的な環境だけが、肉体的な器官が正しい形態に形成されるように子どもに働きかけます」<sup>24)</sup>と述べている。グルネリウスは、シュタイナーの人間理解に基づき身体の発達を促す教育を重視したということがわかる。

ここで健康を捉えるポイントは、健康な発達を身体組織の正常な形成のみならず、グルネリウスが「魂の発達」との関連で「肉体の発達」を述べていたように、シュタイナーにとっての健康な発達とは、「魂的・霊的」な観点から見ての健康を含むものであるということである。この点について広瀬（2009）は、「魂的・霊的にみて身体組織が正常であるか否かとは、身体組織が善や正義、真理や崇高なものに敏感に反応し、これを受け入れる傾向性を備えた身体組織になっているか否かということである」<sup>25)</sup>と説明している。シュタイナーにとって健康とは、肉体的な器官の健全な発達に伴って現れる人間としての道徳的な判断や振る舞い、豊かな思考や感情の表出等も含めた、人間を構成する4要素を包括的に捉えた健康と理解する必要がある。グルネリウスも健康は、人間の道徳性を含む包括的な健康と捉え、大人の道徳的な振る舞いを通じた豊かな表現が子どもの模倣を生み出すよう、心身の成長に寄与する働きかけを行ったのである。

## (2) 子どもの模倣を通じた成長

人間の発達における肉体的・魂的・霊的な成長は、幼児期に特有の「衝動」から発展させられると考えられている。その衝動とは「模倣する (nachahmen)」<sup>26)</sup>という行動である。シュタイナーが幼児の模倣衝動を肉体的な発達との関連から重視するのは、模倣という行為が全身をもって「没頭する」、「没入する」行為であり、手足、胴体、頭、感覚器官、血液循環や呼吸組織など体の全てを動員して模倣対象を受け止めるからである<sup>27)</sup>。したがって、模倣するという行為は、全身体を用いて諸感覚を活発化させ、心身の健康を促進させる行為と理解することができる。模倣衝動は人間の本性の一つであり、特に幼児期に強く現れる特性である。幼児は自身を取り巻く人や物や事柄に対し、肉体の様々な器官や感覚を駆使して感じ取り模倣するが、それと共に人間の内面性まで読み取り模倣する力がある。幼児がありとあらゆるものを模倣するということは、自身の中に今までにはなかった要素を取り入れることでもあり、また、他者、他事と同一の状況・状態を共有するという自己を超えた世界を知る行為でもある。したがって、自分以外の世界に飛び込もうとする幼児をどのように迎え入れるかという視点を受け入れる側の人間が考えていく必要がある。

人間は刻々と変化する環境と途切れることのない時空間の中で生きているのであり、未来に

向かって生きる幼児に向けて最善の模倣対象となっていくことは至難の業とも言える。グルネリウスは、「模倣による幼児教育は、権威による幼児教育よりも、教育者に対して本質的に多くのことを要求します」<sup>28)</sup>と述べている。教育者に要求されることは、「おとながあまりに断定的な口調で子供にのぞみ、命令的な態度をとり、あまりにもすみやかに反応し、拒絶し、干渉し、叱責し、否定する」ような「子供が自分で道をすすもうとする可能性を残酷な仕方奪いとる」方法ではない<sup>29)</sup>。グルネリウスは、「わたしたちが心をひらき、愛情をこめて子供に理解に徹しようとするなら、または子供の最初の繊細な心の動きをそっと受けとめ、頼りなげなその環境適応への試みをやさしく見守ろうとするなら、わたしたちは子供に成長の過程を正しく通過させてあげることができるのです。わたしたちができるだけ干渉するのをひかえるなら、子供は落ち着いて模倣の世界のなかに生き、それを通して見事に人間社会のなかへ成長していくのです。首尾一貫して教育者としてのこの基本的な態度をとりつづけるなら、子供は、やるように命じられたばあいには拒否した事柄をも、自分自身から進んでやってみせることでしょう」<sup>30)</sup>と述べる。この態度をグルネリウスは30年以上にわたって実践し続け、模倣による幼児教育が、子どもの心身全体を健康にしていくことを実証したのである。

## 2-2. ヴァルドルフ幼稚園の保育実践

グルネリウスが、シュタイナーの人間理解に基づく子どもの発達と「模範と模倣の関係性」に即してヴァルドルフ幼稚園草創期より30年以上にわたり実践した「保育内容」、「保育方法」、「環境構成」について見ていきたい。

### (1) 保育内容

ヴァルドルフ幼稚園の保育内容は、主として「自由遊び」と「グループ指導（お絵かき、粘土細工、お話、オイリュトミー、散歩）」から構成されている。

「自由遊び」は、ヴァルドルフ幼稚園の保育構成において重要な位置を占めている。グルネリウスは、「自由遊びが少なすぎると、子供は想像力と創意との開発、生活経験の消化がじゅうぶんなされるための貴重な可能性の場をうばわれます」<sup>31)</sup>と述べている。自由遊びの意義については、『シュタイナー幼児教育基本指針』（*Kindeheit-Bildung-Gesundheit/Leitlinien der Waldorfpädagogik für die Kindheit von 3 bis 9 Jahren*）の中で、「遊びのなかでは、子どもは自分に即して存在しています。外からの秩序も、与えられた目的も、一切の指示もなく、自分の衝動だけに従っています。遊んでいるとき、子どもは自己とひとつになっています。遊びのモチーフも内容も、子ども自身の内側から汲み出されるのです。そのため、原則として、自由遊

びには外からの促しは必要ありません。少なくとも、外からの指導は必要ないのです<sup>32)</sup>と説明している。遊びを通して子どもは、自分の体を感じたり運動の制御をしたりしながら、人や物に自由に関わり、対象物に意味を与え転換しながら、多種多様な事柄を追究していく。このように子ども自身が、自分なりに特定の意味を見出すことが重要であり、外からの指示ではなく、内から湧き起こる衝動が学齢期以降の学びの基盤となると考えるのである。自由遊びを通して、子どもは「自分の世界経験を内面化」し、自然の法則や力学の法則を掌握する。周りの大人から見えることは、「さまざまな現象を集中的に知覚しているだけ」と認識されるが、このような活動の中で自分と世界とを結びつけることで自己形成していく過程こそが、「後の自然科学的研究にとって最善の条件となる」<sup>33)</sup>のである。自由遊びの中に教師が直接的に入らず、見守りが可能であるということは、その前提として子どもが多様な事物と出会い関わり、自らの感覚を通して感じ取っていきけるような環境を構成しているからこそ可能となるのである。

ヴァルドルフ幼稚園の「グループ指導」には、お絵かき、粘土細工、お話、オイリュトミー、散歩等がある。「お絵かき」は、他の幼稚園における活動とは異なる特徴を持っている。ヴァルドルフ幼稚園のお絵かきは、「子供にとって、色そのものに親しむことが本来的な要求なのです」<sup>34)</sup>というグルネリウスの言葉にあるように、お絵かきは色の広がりや、色と色の関係、色同士のぶつかりによる新しい色の誕生等を重視する。そのため、「水彩」がお絵かきとして選ばれている。水彩による色彩体験の意義についてグルネリウスは、「わたしたちを取り巻く周囲の事物の色が、すべて完結した状態で、変わることなく、一定の形態において存在しているのにたいして、紙の上の色は、生れては消えていく変化のなかに現れます。そのようにお絵かきは、ひとつの内的な体験であると同時に、周囲の事物を感覚的に理解するための鍵にもなるのです」<sup>35)</sup>と述べる。子どもたちに与えられる水彩絵の具は、赤、青、黄の三原色である。水彩を体験する時のポイントは、三原色が様々な割合において混ざることによって無限に多様な色が生み出されるという経験をすることである。画用紙は水を含んだスポンジで濡らした後、絵の具を筆に含ませて描いていく。教師はコメントをしたり意味を加えたりすることはなく、子どもは描くことだけに集中する。描かれた絵は回収され、乾かされ、保存される<sup>36)</sup>。

グルネリウスは、「本職の絵描きの仕事ぶりを体験させることも、つねに非常に良い結果を生みます」<sup>37)</sup>と述べている。グルネリウスが幼稚園を設立した当初、子どもたちの遊びの中で籠職人を招き、籠を作る一連の工程を子どもたちに見せる取り組みを行ったことがある。籠職人の様子を見た子どもは、翌日に素材となる葦を欲しがったため、グルネリウスは急いで葦と籠の底となる部分を買って求めに走ったというエピソードがある<sup>38)</sup>。保育における自由遊びのあらゆる場面においてグルネリウスは子どもの内面から真似てみたいという衝動が湧き起こるよ

うな環境を準備していたと言える。

ヴァルドルフ幼稚園には「粘土」の時間がある。用いる粘土は、「蠟ねん土でも、彫塑用のねん土でもかまいません」とされ、保管については、「後者のばあい（彫塑用）には、土を石の容器に保管しておくのが一番」であり、両者ともに、「乾かないようにぬれた雑巾でくるんでおく」ようにし、「ねん土を二つの容器に入れ、一方の粘土をいつでも使えるような状態にしておく」と説明されている<sup>39)</sup>。粘土は子どもが好きなものを作ることが重んじられ、教師の作成指示やコメントは不要とされる。しかし、子どもたちが作成した粘土作品を用いて、例えば「童話の一場面」に用いるというように、作品を活かす視点も必要である。作成した粘土作品は、「棚の上に片付け、子供たちが帰ったあとで、とくに面白い作品は選んで保存用にとっておき、残りはふたたび容器に返しておきます」<sup>40)</sup>というように、子どもに対する直接的なコメントはなされないのが特徴である。

ヴァルドルフ幼稚園では、絵本を用いたお話よりも、教師の声で語られる「お話」が取り入れられている。グルネリウスは絵本を否定しているわけではなく、「絵本を使用するときにも、子供たちに本の絵を見せながら、自由にその筋を話してきかせるのがよいのです」<sup>41)</sup>と言うように、絵本を用いたとしても教師自らが「語る」ことに重きが置かれる。グルネリウスは、語る素材として「グリム童話」を勧めており、その理由について「真の童話はこのうえなく深い人間への洞察につらぬかれています」<sup>42)</sup>と述べている。深い人間への洞察につながる善悪の観念把握はイメージと結びつき、子どもの内的な経験を伴ってはじめて真実への理解へと辿り着く。グルネリウスは、童話を通した教育的な意義について、「童話の世界が内的な体験世界を映しだしていること、したがって日常生活で出会う事柄とはただ名前の上でしか結びついていないこと、それゆえ物語の王子は遺伝や家系とはまったく関係がなく、ただ純なる心の在り方や行動力を問題にしているだけだということ、このことを理解したならば、良心のとがめをうけることなく、わたしたちはつぎのように言うことができるはずです。『きっといつか君も大きくなったとき、童話のなかの王子様のように、君に助けを求めている誰かを助けることができると思いますよ』」<sup>43)</sup>と述べている。ゆえに、ヴァルドルフ幼稚園のお話の時間は、人間の内面生活における「このうえもなく深くて繊細な心の営みを教えるきわめてたいせつな教育の機会」<sup>44)</sup>と捉えるのである。

自由ヴァルドルフ学校においても必修科目として位置付けられている「オイリュトミー」についてグルネリウスは、「シュタイナーの創始した舞踏。音楽やリズムによって呼びおこされた自由なファンタジーによって踊る遊戯の一つ」<sup>45)</sup>と説明している。オイリュトミーとはギリシャ語の「オイ」=美しい、「リュトミー」=動きという意味で、シュタイナーの妻であるマ

リー・シュタイナー (Marie Steiner 1867-1948) が名付けた<sup>46)</sup>。オイリュトミーは運動芸術として誕生し、動きの源泉は言葉に求められる。秦 (2001) は、「オイリュトミーの動きは、言葉を発する時に、のど、口などの言語器官に生じる動きのプロセスを、全身の動きへと変容させたもの」とし、具体的には、「のどと口が開かれて『あ』という音となって発せられます。『開き』が『あ』という母音の動きであり、オイリュトミーにおいては、最も基本的には両腕を一定の角度で開く身振りをあらわします。『い』は、しっかりと立ちつつ上方へとまっすぐに伸びる前身の姿勢で、両腕を対角に伸ばすことでもっとはっきりとあらわされます。『お』は、丸い発生そのままに、あたたかく世界を包む動作です」<sup>47)</sup>と、言葉と動きの密接なつながりを説明している。グルネリウスは、「オイリュトミーは自由に自然な仕方で運動する喜びを発達させ、子供のファンタジーをもっと美しく刺激する可能性をもっている」<sup>48)</sup>と述べているように、子どもの生命力の育みに寄与する「教育的な芸術」<sup>49)</sup>でもある。

「散歩」についてグルネリウスは、「みんなでいっしょに散歩する時間も、子供たちにいろいろな体験を与えてくれる大切な時間です」<sup>50)</sup>と散歩の意義を認識している。散歩を通して、十分に体を動かすこと (飛ぶ、跳ねる、走る等)、約束事の実践 (道の歩き方、行って良い範囲等)、他者への配慮や思いやり (歩きの遅い子を待つ等、自己抑制 (目標に従う等)) 等、心身の形成や社会性の学びにもつながっていく。さらに、グルネリウスは、専門家を訪ねる過程を散歩に用いることも提案している。「園芸家や農家のところへ、または農場へむかう道を散歩します。そこでは動物たちが飼育されていたり、畑が耕されていたりします。あるいは散歩の途中で靴屋や鍛冶屋や指物屋や籠作りなどの職人をたずねたりします。すると子供たちはなんでも来ても大喜びで見物し、その仕事の世界に入りこみ、くりかえしてそれとともに体験します。生活を維持するのに大切な仕事の手順が次々になされていくプロセスを子供たちが印象をもってうけとめることは、とても大切なことです。そこでは専門の知識、手際よさと同時に、人間にどんなことができるのか、仕事にどんな価値があるのか、ということが体験できるのです」<sup>51)</sup>と散歩を通じた関心の広がりや人間への尊敬をも含めた意義を見出している。

## (2) 保育方法

ヴァルドルフ幼稚園の保育方法として採用されているのは、「縦割りグループ」である。グルネリウスは、「いろいろと試みた結果では、後者のタテ割りの方が良いようです」<sup>52)</sup>と述べ、子どもたちにとっての共同社会の原像である家庭内における家族構成の原則に則り、縦割りのグループにおいて保育を行っている。縦割りとなると、3歳から7歳までの発達の様相が異なる子どもが一つの

部屋に所属するため、シュタイナーの発達論に基づきながら、その時期に最もふさわしい方法と内容をもって子どもと対面する必要がある。

どの発達段階においても遊びを重視することは基本であり、芸術的な手法を伴った遊びこそが豊かな人間形成を可能とする考えをグルネリウスは次のように表している。「わたしの体験では、これらの子供たちにも、学校教育のような学習や暗記を要する事柄から離れて、純粹に芸術的なものによって刺激を与え、そしてじゅうぶん遊ばせる保育を行えば行うほど、子供たちの個性と才能は調和的に発達し、同時に身体の器官もたくましく育っていきます。このような子供たちは七歳になって小学校に通うようになると、興味と集中力をもって学習できるようになり、その力と健康の貯えによって、その後の人生の諸要求に容易に応じていくことができるようになるのです」<sup>53)</sup>。グルネリウスは、シュタイナーの言葉を引用しながら、遊びは子どもにとって真剣な行為であること、遊びは意志の形成に寄与する働きかけであること、人生を生きる全てを学ぶことであること等を強調している。そして、遊びの中の想像力を大切に育成することが、「行動のあたたかさ」と親密さ<sup>54)</sup>を生み出し、自己形成へとつながっていくのである。

### (3) ヴァルドルフ幼稚園の環境

#### ① 保育室

グルネリウスは、子どもの成長にとって「人」との関わりを通した「模範と模倣」の関係性を重視していたが、物的な保育環境についてもその重要性を認識し、「幼児は、大人であれ子供であれ、周囲の人間からもっとも強い印象を受けるにせよ、周囲の人間以外の諸事情もまた、大人が考える以上に幼児の成長に寄与しています。この点が幼稚園の建設に際して、とくに留意されなければなりません」<sup>55)</sup>と指摘している。グルネリウスが理想とした保育環境は、日当たりのよい保育室と主室につながる副室を備えていること、主要空間から直接洗面所につながる通路があること、そして戸外遊びができる園庭があるというものである<sup>56)</sup>。また、保育環境を司る色彩はシュタイナーの色彩論と関連し、「壁紙は、淡い色調のパステル・カラーで一色に塗り」、「天井には真白か非常に淡い色調を」と保育室全体の色味に触れると共に、「自然の明るい木の色調をのこした家具は周囲の淡い色調とぴったり合います」と保育室で用いられる家具との調和の大切さについても指摘する<sup>57)</sup>。保育室の環境構成については、幼稚園の置かれている地域的な環境や財政的基盤によってその設計には差異が生じることが推察されるが、グルネリウスが大切にしたのは、どのような環境下においても「芸術的感觉によって多くのことを達成することができる」<sup>58)</sup>という点であった。環境を作るのは保育者自身であり、どのよう

な状況においても芸術的な感覚を用いた保育を展開することを何よりも重要視していたことが伺える。

保育室には遊具も置かれている。ヴァルドルフ幼稚園で用いる遊具は、「形態が固定化されなくなればなるほど、そして子供のために想像の余地が残されていればいるほど、ますます遊びの可能性を提供するようになります。子供は何度でも新しく創造的にもちやと結びつくことができますし、おもちゃに寄せる喜びはいつまでも続きます」<sup>59)</sup>と述べる。シュタイナーは、「人間の脳やその他の器官も、周囲から適切な印象を受け取ることによって正しく成長する」<sup>60)</sup>良い例として、人形の事例を挙げている。シュタイナーは、使い古したテーブル用のナプキンを用い、ナプキンの二つの先端部分を巻いて両脚に、別の二つの先端部分は両腕に、さらに結び目を作り頭にしてインクで眼と鼻と口を描いただけの人形を提唱する<sup>61)</sup>。その意義についてシュタイナーは、「ナプキンを巻いて作った人形を前にするとき、子どもが想像力で補うことで、初めてそれは人間の姿に見えるようになります。このような想像力の活動は、脳の形態を形成するように働きかけます。このとき脳は、手の筋肉が適切な仕事をとおして発達するのと同じように成長していきます」<sup>62)</sup>と述べる。美しく機能的な人形は売っているが、そのような人形では、子どもの脳が働くことはなくなり、子どもの持つ形成力を荒廃させてしまう。ゆえに、シュタイナーにとって重要な人形（遊具）は、「子どもの中に生きた存在の表象を呼び起こす」<sup>63)</sup>ものであり、グルネリウスもシュタイナーの人間形成論に従って保育環境を整えていたことがわかる。

## ② 園庭

グルネリウスが園庭の存在を重視したのは、園庭は子どもの遊びを駆り立てる力があると考えたからである。駆り立てる力に導く園庭の構造は、曲がりくねった道、小山や起伏、花壇や大樹や植え込み、小庭園、空地、穴掘り用地、芝生、遊具（ブランコ）、木の幹や板、用具（シャベル、鋤、縄など）の配置である。このような園庭で子どもは、走り回る、転がる、隠れる、潜る、掘る、乗る、休む等多様な機能を用いることが可能となる。砂場を設置することも推奨しており、縦5m、横3m、深さ60cm、砂場の木枠がベンチになるようにすると詳細に説明する。遊びは幼児期の身体を形成する重要な活動であり、園庭における遊びにおいても健康な身体の育みを意識することが求められる。シュタイナーは、「『子どものなかの健康な欲求や欲望や喜びは、何を求めているのか』ということを愛情をこめて観察してあげなくてはなりません。喜びや心地よさは、肉体の器官の物質的な形態を正しく生み出す力になります」<sup>64)</sup>と述べる。グルネリウスも子どもの身体形成に寄与する園庭設計を考えていたと言える。

### 3. 考察

本稿では、草創期ヴァルドルフ幼稚園におけるエリザベス・グルネリウスの保育実践について概観した。グルネリウスは、「コメニウス・ゼミナール」と「バスタロッチ・フレーベル・ハウス」において幼稚園教員養成を受けていたが、シュタイナーが幼児教育で重視する「模倣」による教育方法については知見がなかった。しかし、シュタイナーの「人間の本質を観察することから始める」という言葉を信じ、グルネリウス自身の生活を通して実践的に吟味付けを行った。その結果、「ふさわしい手本がそこにあるならば、0歳から七歳までの幼児は、必要な態度をすべて自分自身で身につけることができる」と幼児教育における模倣による学びを価値づけるに至った。

模倣による学びの価値づけの背景には、グルネリウスの発達理解や保育実践の基本があった。グルネリウスは、心身の発達理解の中で「魂の発達」という言葉を用いている。これはシュタイナーの人間理解に基づく概念であり、「魂」すなわち、「思考、感情、意志、意欲、欲求、関心、記憶力、意識などの言葉で表現される力や活動」は、「肉体」の発達に依存されているため、まずは肉体が正しい段階を経て発達しなければならないと考えた。乳幼児期に身体を発達させることにより、道徳的な判断や振る舞い、豊かな思考や感情の表出等も含めた健康な発達を促すことへとつながっていく。

シュタイナーは、子どもの模倣という行為が、全身をもって「没頭する」、「没入する」行為であると共に、全身体（手足、胴体、頭、感覚器官、血液循環や呼吸組織など）を動員して模倣対象を受け止めているため、模倣行為は全身体を活発化させ、心身の健康を促進させる行為と理解した。グルネリウスは、教育者ができるだけ子どもに干渉するのを控え、首尾一貫して子どもが落ち着いて模倣の世界の中に生き続ける態度を取り続けることにより、子どもは自ら進んで物事に取り組み、生きる力を育むということを「保育内容」、「保育方法」、「環境構成」からの実践を通して意義づけたのであった。

ヴァルドルフ幼稚園の「保育内容」は、主として「自由遊び」と「グループ指導（お絵かき、粘土細工、お話、オイリュトミー、散歩）」から構成されていたが、いずれの活動においても「内から湧き起こる衝動」が重視されていた。そのためには、子どもが多様な事物と出会い、関わり、自らの感覚を通して感じ取っていきけるような保育内容を準備することが教育者の使命となる。例えば、「お絵かき」は水彩を取り挙げていたが、水彩の色が混じり合い変化する様子の内的体験を通じ、周囲の物事にも様々な流動的な変化が起こることを感覚的に理解していく。「お話」では、教師から語られる内容が、子どものイメージと結び付くことによって、人

間の内面生活における心の営みへとつながる教育の機会としていた。また、「散歩」では、心身を存分に動かすと共に、歩みを共にする仲間を思いやり、さらには、地域で働く人に出会うことによって様々な仕事に関心を抱き、人間の持つ力や仕事に対する価値等、散歩を通した関心の広がりや人間への尊厳をもたらす意義を見出した。ヴァルドルフ幼稚園の保育内容は、まさに様々な衝動を突き動かす構成であったと言える。

「保育方法」においてグルネリウスが念頭に置いたことは、「芸術的な手法を伴った遊びの重視」であった。遊びは子どもにとって真剣な行為であり、意志の形成に寄与するため、遊びにおける想像力を育成することは、温かな行動を生み出すものと理解された。そのため、遊びに用いられる遊具（環境）は、子どもが想像力を働かせる素朴な物が準備されていた。例えば、テーブル用のナプキンで作られた人形は、生きた存在の表象を呼び起こすため、脳の形成に寄与する。ヴァルドルフ幼稚園では、形態が固定化されず、想像の余地が残された遊具を提供することにより、創造的な遊びの可能性を高める方法を用い、脳やその他の器官も周囲からの適切な印象を受け取るにより正しく成長するよう意図されていることが明らかとなった。

以上のように、グルネリウスの保育実践は、シュタイナーの人間理解に基づき、自身の実践を通して模範と模倣の関係性が幼児教育の基盤を成すものであることを実証したのであった。幼児期の子どものための幼稚園の意義は、子どもが身体の健全な成長を遂げるために、幼児期に特有に生じる「模倣」衝動に寄り添い、教師が道徳的な模範として立ち続けることにより、身体のみならず「魂」の成長も手助けする点にある。ヴァルドルフ幼稚園の設立から85年の時が経った今も、グルネリウスが実証した模範としての保育者の在り方が、子どもの健全な育成にとって必要不可欠な要素であることが認められ、世界的に実践されている。本稿では、グルネリウスの保育実践の一部を概観するとともに、草創期における実践内容や方法についてさらに調査する必要がある。それと共に、グルネリウスの実践から脈々と引き継がれてきたヴァルドルフ幼児教育実践が今現在、我が国においてどのように取り扱われているのか検証することも課題である。今後は、ヴァルドルフ幼児教育実践の歴史的経緯の整理と共に、現在の保育実践に対する実証的な検証の観点から研究を進めていきたい。

## 註・引用文献

- 1) エリザベス・グルネリウス (Elisabeth Marie Adelheid von Grunelius) は、1895年、フランスエルザス地方シュトラスブルク近郊のコルプスハイムに生まれる。シュタイナーの人智学に感銘を受け、スイスのドルナッハにシュタイナーを尋ね、その後、シュツットガルトの自由ヴァルドルフ学校創設に

- 関わりと共に、1926年には附属幼稚園を創設する。ナチス政権によるヴァルドルフ学校閉鎖により、アメリカペンシルバニア州パークントンや、ニューヨーク州ガーデンシティ、フランスパリ近郊のシャトゥー等に学校や幼稚園を設立した。1989没。
- 2) 自由ヴァルドルフ学校 (Freie Wardolf Schule) は、1919年にヴァルドルフ・アストリア煙草工場の従業員の子弟及び一般の子弟のための国民学校として創設された。国家権力による学校統制への批判から、子どもの本性に相応しい日々を送らせられる場であり、真に人間らしい生活を送ることのできる力を育むためにシュタイナーの人智学的人間学に基づく教育方法理論を支柱とした。
  - 3) エミール・モルト (Emil Molt 1876-1936) は、ドイツの商業顧問官であり、ヴァルドルフ・アストリア煙草工場の社長である。モルトは、工場の労働者、職員の間人としての成長や教育に高い識見を持っており、彼らの成長のための社内雑誌の発行、教養講座の開設等、様々な取り組みを行った。
  - 4) Susan Howard, 2005, *The First Waldorf Kindergarten. The Biginning of Waldorf Early Childhood Movement.* (Published in the Gateways newsletter of the Waldorf Early Childhood Association of North America in 2005.)
  - 5) 前掲書 4)
  - 6) 前掲書 4)
  - 7) 杉岡幸代, 2016, 「シュタイナー幼稚園の黎明期」, 『大阪キリスト教短期大学紀要』, 第56集, p. 124
  - 8) 前掲書 7) p. 125
  - 9) 前掲書 4)
  - 10) 前掲書 4)
  - 11) ゲーテアナム (Goetheanum) とは、人智学に基づいた芸術活動である神秘劇を上演する建物である。1913年、スイスのバーゼル近郊のドルナッハ (Dornach) に建設された。
  - 12) 前掲書 4)
  - 13) 前掲書 4)
  - 14) E・M・グルネリウス, 高橋巖・高橋弘子訳, 1999, 『七歳までの人間教育 シュタイナー幼稚園と幼児教育』, フレーベル館
  - 15) 前掲書 14) p. 13
  - 16) 前掲書 14) p. 14
  - 17) 前掲書 14) p. 14
  - 18) ルドルフ・シュタイナー, 松浦賢訳, 2000, 『完全版 霊学の観点からの子どもの教育』 (Die Erziehungdes Kindes von Gesichtspunkte der Geisteswissenschaft), イザラ書房, p. 45
  - 19) 前掲書 14) p. 15
  - 20) 前掲書 14) p. 15
  - 21) 前掲書 14) p. 16
  - 22) 広瀬俊雄, 2009, 『シュタイナーの人間観と教育方法—幼児期から青年期まで—』, ミネルヴァ書房, p. 44
  - 23) 前掲書 22) p. 68
  - 24) 前掲書 18) p. 64
  - 25) 前掲書 22) p. 97
  - 26) 前掲書 22) p. 114
  - 27) 前掲書 22) p. 114
  - 28) 前掲書 14) pp. 23-24

- 29) 前掲書 14) p. 25
- 30) 前掲書 14) pp. 25-26
- 31) 前掲書 14) p. 53
- 32) ライナー・パツラフ, ヴォルフガング・ザスマンスハウゼン, 入間カイ訳, 2015, 『シュタイナー教育基本指針Ⅱ三歳から九歳まで』(Kinheit-Bildung-Gesundheit/Leitlinien der Waldorfpädagogik für die Kindheit von 3 bis 9 Jahren), 水声社, p. 68
- 33) 前掲書 31) p. 72
- 34) 前掲書 14) p. 54
- 35) 前掲書 14) p. 54
- 36) 前掲書 14) p. 58
- 37) 前掲書 14) p. 58
- 38) 前掲書 4)
- 39) 前掲書 14) p. 59
- 40) 前掲書 14) p. 60
- 41) 前掲書 14) p. 61
- 42) 前掲書 14) p. 61
- 43) 前掲書 14) p. 64
- 44) 前掲書 14) p. 64
- 45) 前掲書 14) pp. 66-67
- 46) 秦理絵子, 2001, 『シュタイナー教育とオイリュトミー 動きとともにいのちは育つ』, 学陽書房, p. 29
- 47) 前掲書 45) pp. 22-23
- 48) 前掲書 14) p. 67
- 49) 前掲書 45) p. 27
- 50) 前掲書 14) p. 67
- 51) 前掲書 14) p. 68
- 52) 前掲書 14) p. 76
- 53) 前掲書 14) p. 77
- 54) 前掲書 14) p. 71
- 55) 前掲書 14) p. 78
- 56) 前掲書 14) pp. 78~79
- 57) 前掲書 14) p. 79
- 58) 前掲書 14) p. 78
- 59) 前掲書 14) p. 83
- 60) 前掲書 18) p. 66
- 61) 前掲書 18) p. 66
- 62) 前掲書 18) p. 67
- 63) 前掲書 18) p. 67
- 64) 前掲書 18) p. 70

近藤千草

### 参考文献

- E・M・グルネリウス, 高橋巖・高橋弘子訳, 1999, 『七歳までの人間教育 シュタイナー幼稚園と幼児教育』, フレーベル館
- 杉岡幸代, 2016, 「シュタイナー幼稚園の黎明期」, 『大阪キリスト教短期大学紀要』, 第56集
- Susan Howard, 2005, *The First Waldorf Kindergarten. The Beginning of Waldorf Early Childhood Movement.* (Published in the Gateways newsletter of the Waldorf Early Childhood Association of North America in 2005.)
- 秦理絵子, 2001, 『シュタイナー教育とオイリュトミー 動きとともにいのちは育つ』, 学陽書房
- 広瀬俊雄, 2009, 『シュタイナーの人間観と教育方法—幼児期から青年期まで—』, ミネルヴァ書房
- ライナー・パツラフ, ヴォルフガング・ザスマンスハウゼン, 入間カイ訳, 2015, 『シュタイナー教育基本指針Ⅱ三歳から九歳まで』, 水声社
- ルドルフ・シュタイナー, 高橋巖訳, 1985, 『教育の基礎としての一般人間学』 (*Allgemeine Menschenkunde als Grundlage der Pädagogik*), 創林社, pp.70-71
- ルドルフ・シュタイナー, 松浦賢訳, 2000, 『完全版 霊学の観点からの子どもの教育』 (*Die Erziehung des Kindes von Gesichtspunkte der Geisteswissenschaft*), イザラ書房